

機関誌「エレクトロヒート」200号の発刊に当たり、日本エレクトロヒートセンターの技術懇話会（平成26年12月5日）において、機関誌「エレクトロヒート」の歴史と成果を振り返るとともに、課題と今後の期待を議論する座談会を開催した。参加者は以下の通りである。（敬称略）

（司会）

岡崎 金造：特別会員、元常任理事、運営委員（富士電機）

（出席者）

林 静男：元誘導加熱技術委員長（富士電機）

谷野 守彦：常任理事、元誘導加熱技術委員長（高周波熱錬）

佐々木 完：特別会員、元機関誌編集委員長、元遠赤外線部会長（ササキテック）

橋本 栄二：特別会員、元常任理事、元アーク・プラズマ加熱技術委員長（元電力中央研究所）

木村 嘉孝：遠赤外線加熱技術部会委員（木村技術事務所）

天川 正士：常任理事、技術委員長、元アーク・プラズマ加熱技術委員長（電力中央研究所）

青 範夫：元常任理事（スチールプランテック）

花形 将司：特別会員、元常任理事、元運営委員長（省エネルギーセンター）

柳田 啓一郎：元技術部長（元東芝）

機関誌「エレクトロヒート」の歴史と成果

（岡崎氏：司会）

機関誌「エレクトロヒート」の歴史と分野別論文数の推移を別紙（32頁参照）に纏めた。これを参考にして頂きながら、本日の座談会を進めたい。機関誌「エレクトロヒート」は1980年に「電気加熱情報」として創刊され、当初はUIE（国際電熱工学連合）からの技術情報と国内の技術情報の紹介を行っていた。その後、1993年に機関誌の名称を「エレクトロヒート」に変更した。論文数はヒートポンプのように急増している分野も有るが、UIE脱退に伴い国際化対応や規格など急激した分野もある。まずは、100号記念号（1998年）の編集委員長であった佐々木さんに当時のお話をお願いしたい。



（佐々木氏）

100号記念号では、電気加熱技術の将来展望のアンケートを行った。印象に残っているのは電気自動車と車の自動運転だが、ほぼ予想



は当たったのではないかと思う。当時の編集委員は大変熱心で、年に1~2度外に泊まり込みで、夜11時、12時まで議論をしたのを覚えている。

（岡崎氏：司会）

遠赤外線分野の木村さんも長らくご尽力頂いていますが。

（木村氏）

私は昭和電工の出身だが、当時は昭和電工はセンターの有力メンバーであった。機関誌は良く読んでいて、電気炉の効率改善に生かしたりした。その後、遠赤外線加熱への活用を考え、色々な材料の放射特性を調べたがそれほど差がなく、遠赤外線は使い方が問題だと気が付いた。遠赤外線加熱技術部会に入り、いろいろ勉強させてもらったが、その後遠赤外線ブームが起こり、通商産業省（当時）から「遠赤外線協会」を発足させるように指導があった。



昭和電工は当時、電力会社の最大ユーザーだった。しかし、オイルショックで電気炉は全て止まり、アルミ電解槽を保有している会社は日本軽金属だけになってしまった。